

会話クラスにおける他者評価に関する一考察 ——記述コメントとアンケート結果から——

小浦方 理恵

1. はじめに

2007 年度前期、チェンマイ大学人文学部東洋言語学科日本語講座専攻 2 年生を対象とする会話クラスにおいて、ロールプレイやグループワークなどの発表の際、発表の聞き手である学生から発表についてコメントをする活動（以下、他者評価活動）を行った。

最近、作文教育を中心に行われているピアレスポンスなど、学習者同士で評価しあう活動が注目されている。これは、評価というものは教師のみが行えるものではなく、学習者同士も行うことができ、それによってお互いの学習を向上することができる、という考えの下で行われているものである。本稿の実践においても、上記の考え方に従い、お互いの会話発表において教師のみが発表についてコメント、評価を行うのではなく、学習者もコメントをし、誰の発表がよかったのか評価を行った。そして本稿では、この実践において学習者はどのように他者評価を行っているのか、そして、学習者同士で発表を評価しコメントする活動についてどのように感じているのかを明らかにすることを目的とし、実際のコメントやアンケート、インタビューデータから分析を行った。

2. 授業・活動概要

2.1 授業概要

まず、今回の活動を行った、日本語専攻 2 年生対象の会話クラスについて概要を述べたい。

科目名：Japanese Conversation（必修科目）

日本語レベル：初中級程度⁽¹⁾

学習者：28 名

担当教師：1 名

授業期間：2007 年 6 月 4 日から 9 月 20 日まで（授業回数 28 回）

授業時間：週 2 回（月曜日・木曜日）、各 90 分授業

シラバス：「休みの日の過ごし方」「大学生活」「自分の将来」などの話題シラバス

学習目標：初級時に学んだ文型を使って、ある程度の長さの会話をする。語彙を増やす。

主な学習内容：テキストに基づいた運用練習（ロールプレイとその発表）、短いスピーチ

使用テキスト：オリジナル教材

2.2 他者評価活動概要

次に、授業内に行った他者評価活動について述べたい。今回の実践では2種類の他者評価活動を行った。まず授業ごとに、ロールプレイやグループワークなどを発表する際、教師からのコメントだけではなく、学習者からも口頭によりコメントを行った（口頭コメント）。口頭コメントでは、学習者は発表に対する感想、よかった点、改善点などを述べた。さらに、課題として全員に発表をさせた時には、学習者に評価表を配布し、発表がよかったペア・グループとその理由を記入させた（記述コメント）。これらの活動はどちらも日本語で行った。

3. 記述コメントによる他者評価の内容とその考察

前節で述べたように、本実践では口頭コメントと記述コメントの2種類の活動を行ったが、本稿では全体の傾向をつかむために、全員が記入した記述コメントについて分析を行った。全記述コメントは342コメントであった。また、記述コメント活動は2回行われ、第1回発表の記述コメントは183コメント、第2回発表の記述コメントは159コメントであった。

全記述コメントを内容のカテゴリー別に分類した結果、表1のような結果になった。また、表1の下にカテゴリーの説明とコメント例を記す⁽²⁾。

表1 全記述コメントのカテゴリー

カテゴリー	コメント数	割合 (%)
全体的印象	128	37.4
視覚的部分	100	29.2
内容	48	14
音声	46	13.5
会話の長さ	19	5.6
語彙・表現	1	0.3
合計	342	100

※カテゴリーの説明とコメント例

全体的印象…抽象的な印象を述べただけのコメント

例) おもしろかった、たのしかった、よかった

視覚的部分…視覚的部分についてのコメント

例) パフォーマンスが楽しかった、アクションがすごい、小道具がよかった

内容…会話の内容、スクリプトについてのコメント

例) 話がおもしろかった、スクリプトが自然な会話だった

音声…発音、アクセント、話し方などについてのコメント

例) 発音がよかった、話し方が自然、ぺらぺら、声が大きい

会話の長さ…会話の長さについてのコメント

例) 長い会話、スクリプトが長い

語彙・表現…語彙や表現についてのコメント

例) 言葉の使い方がいい

まず、学習者によるコメントの特徴をまとめると、「楽しかった」「おもしろかった」「かわいかった」など、非常に抽象的で主観的なコメントが大多数を占めた。反対に、会話の具体的部分に注目したコメントや、客観的なコメントはほとんど見られなかった。木原（2006）も学生による他者評価は主観的な理由によるものが一番多いと指摘しているが、今回の実践でも同様の結果になった。

次に、カテゴリー別に見ていきたい。カテゴリーについて簡単に説明すると、このカテゴリーは会話のどの部分についてコメントをしているかによって分類している。「全体的印象」カテゴリーはどの部分にも注目していない、もしくは注目していても言及していないコメントである。その他の5カテゴリーは「全体的印象」カテゴリーに比べると会話のある部分に注目しており、より具体的なコメントだと言える。しかし、コメント例を見てみると、まだ抽象的なものが多いことが分かる。

各カテゴリーの割合を見ると、全体的印象が 37.4 パーセント、視覚的部分が 29.2 パーセントと、この2つのカテゴリーだけで全体の約 70 パーセントにもなる。このことは学習者は発表のある部分に注目するのではなく、抽象的な印象しか持たないことを示しているといえる。さらに、発表の部分に注目するときはまずパフォーマンスなど、発表の視覚部分に注目する傾向があるようだ。また、文法、語彙、表現などについてのコメントは 342 コメント中 1 コメントと、全くと言っていいほどコメントがなかった。林（2007）でも学習者による他者評価は主観的なコメントと視覚的な非言語部分へのコメントが大部分で、文法、語彙についてはコメントがなかったと述べられている。

さらに、記述コメントを第1回発表と第2回発表に分け、カテゴリーの割合を比べてみたところ、表2のような結果になった。ちなみに、第1回発表と第2回発表の間には9回の口頭コメント活動を行っている。

表2 第1回記述コメントと第2回記述コメントのカテゴリー別割合

	第1回 (%)	第2回 (%)
全体的印象	37.7	37.1
視覚的部分	35	22.6
内容	13.1	15
音声	10.9	16.4
会話の長さ	3.3	8.2
語彙・表現	0	0.6

表2から分かるように、全体的印象について多く述べるという傾向はほとんど変化がないままであったが、視覚についてコメントする割合が減ってきており、また、音声と会話の長さについてコメントする割合は増えている。そして、語彙・表現についてのコメントが第2回記述コメントにおいて1コメントだけではあるが見られた。これは、学習者は最初は視覚的な部分に注目していたのが、何回か口頭コメントをすることによって、徐々に音声や語彙など、視覚以外にも注意が行くようになってきていたと言えるかもしれない⁽³⁾。

4. 学習者へのアンケート

学習者はクラス内で行った他者評価活動をどのように感じているのかを調べるため、コメントをすること、コメントをされることをどう思うかについてアンケート調査を行った。また、アンケートではタイ語の使用も許可した。そして、当日欠席した1名を除く27人から回答が得られた。その結果の概要を表3に記す。コメントをする活動については約半数の学習者が肯定的に捉えており、また、コメントされることに対しては88.9パーセントとほとんどの学生が肯定的な意見であった。また、肯定的／否定的というのは、どちらについても述べてあった回答や、どちらともとれなかった回答である。

表3 アンケート結果概要

活動	回答	人数 (人)	割合 (%)
コメントする	肯定的	13	48.1
	否定的	8	29.6
	肯定的／否定的	6	22.2
コメントされる	肯定的	24	88.9
	否定的	0	0
	肯定的／否定的	3	11.1

以下、コメントをすること、コメントをされることに分けて、アンケート結果の内容をより詳しく述べたい⁽⁴⁾。

4.1 コメントすることに対する意見

コメントすることに対して、約半数の学習者から肯定的な意見が聞かれた。これらの意見をまとめると、以下の5点になる。

〔肯定的意見〕

① 発表の改善になる

例)「コメントをすることによって、友達は自分の発表の良かったところや改善点に分かって、改善することができる」「友達に注意したところは自分にも適応できる」

② 日本語が上手になる

例)「言葉の使い方や、言葉を使って気持ちを表すことがうまくなる」「友だちにコメントをするときに日本語を使う」

③ 言いたいことが言える

例)「友だちに言いたいことが言えて、褒めたいことが褒められる」「(コメントを言うことは)よかった。友だちに言いたいことが言えるから」

④ 情意的意見

例)「楽しい」「おもしろい」

⑤ コメントをするために友人の発表を聞くようになった

しかし、否定的な意見もいくつか見られた。これらも以下にまとめる。

〔否定的意見〕

① 日本語力の不足

例)「時々私は新しい言葉を思い出せない」「あまり好きじゃないです。日本語で言わせるから、その言葉が思い出せない」

② 経験不足

例)「やはりしたことないですから、何をいったらいいかがわかりませんでした」

③ 友人への気遣い

例)「いつも(友人は)『よかった』と言いますね。ほんとうのことかわかりません」「マイナス意見を言わず、その理由もみんな大体同じで中間的なものばかり」

④ 情意的意見(緊張)

例)「自分がコメントを求められると緊張する」「コメントするとき、緊張してあまり言葉を思い出せない」

⑤ 友人の発表がわからなかった

例)「友だちの発表を聞いてもわからない」

また、他者評価における友人への気遣いについては、高木（1992）、林（2007）でも指摘されていることである。

4.2 コメントされることに対する意見

コメントされることに対しては、ほとんどの学習者が肯定的に捉えており、否定的な意見しか述べなかった学習者は誰もいなかった。以下、それぞれをまとめたものを記す。

〔肯定的意見〕

① 発表の改善になる

例)「発表のよかったところ、悪かったところがわかって改善できる」「今度はもっといい発表をできるようになります」

② 自分の発表の確認

例)「友だちのコメントを通して、自分の発表がわかってもらえたかがわかる」

③ 情意的意見

例)「気持ちがいい」「友達にありがたい気持ち」「うれしい」

④ モチベーションの向上

例)「誉められたところをもっとよくできるようにがんばれる」「自分が精一杯発表して、それを褒めてもらえたら次の発表へのモチベーションがあがる」

〔否定的意見〕

① 情意的意見（恥ずかしい）

② コメントが本当かどうか分からない

例)「自分が遠慮しながらコメントしているので、(友人は)本当のことを言わないと思っている」

4.3 インタビュー結果

アンケートの補足として、このクラスの3名の学習者にインタビューを行った。インタビューは「コメントすること／されることについて」「コメントするとき／されたときの気持ちについて」を中心に学習者の意見を聞いた。インタビューの結果はアンケート結果と同様のものが得られたが、「マイナス面、訂正点は教師から指摘してほしい」「学習者からコメントをする経験はあまりないので、コメントをする練習をした方がいい」というように、アンケートからは見ることができなかった他者評価活動への意見を聞くことができた。

5. 他者評価活動の効果と問題点

アンケートの結果から、学習者は他者評価活動を概ね肯定的に捉えており、特にモチベーションの向上など、他者評価をされる側の情意面において、他者評価活動は効果があると言える。しかし、他者評価をする側からは、日本語力の面から言いたいことはあるが言うことができない、

友人への気遣いから否定的なコメントができない、という意見もあった。さらに、他者評価の内容を見てみても、抽象的、主観的なものになりがちなこと、視覚的部分にばかり注目してしまうことなどの問題点もある。評価する側にとっても、される側にとっても、より意味のある他者評価活動にするためには、これらの問題点を解決できるような手立てを考えることが必要である。

6. 今後の課題

今回の調査で、学習者による他者評価はどのようなものか、学習者による評価の実態や問題点を知ることができた。今後、他者評価活動を行う際には、ただ他者評価のみをするだけではなく、問題点を改善できるような活動とともに行われる必要があると感じている。例えば、学習者による評価は抽象的で主観的だったという問題点があったが、自己評価活動を行ったり、評価観点を一緒に考える活動をすることが、学習者の評価観点をより広げ、深めるために有効な手立てになるかもしれない。しかし、そもそも評価観点の広がり、深まりは学習者の日本語力と共に自然に養われていくものかもしれない。もしくは、教師からの何らかの手立てを必要とするのかもしれない。または、他者評価活動を日本語だけではなく、母語を使用することによって、今回の実践では見られなかった新たな学習者の評価観点が見えてくる可能性もある。よって、これからは評価観点に焦点を絞り、他者評価の実態をより詳細に調査し、またその変化を調べることで、他者評価活動と学習者の評価観点とのつながりについて考察を深めたいと考える。

注

- (1) 学習者は1年次に初級日本語コースを学び、修了している。
- (2) 日本語が分かりにくいコメントは教師が訂正した。
- (3) 発表に対する学習者の視点とその変化について、厳密に調査するためには、日本語だけでなく他者評価活動を行うのではなくタイ語の使用も認めること、記述コメント活動を2回だけではなく、何回も行い、そこでの変化を見ることが必要である。
- (4) タイ語で回答したアンケートについては日本語に訳したものを載せてある。

付記：本稿はタイ国日本語教育研究会第20回年次セミナー分科会において発表を行い、そこで頂いたコメントをもとに加筆修正を行ったものです。分科会でコメントを下された方々、そしてお忙しい中、タイ語翻訳をしてくださったチェンマイ大学のサランヤー・コンジット先生にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

- 木原直美（2006）「学生の自己・他者評価に関する一考察―教師評価との比較を中心に―」『長崎外大論叢』第10号、長崎外国語大学、pp.105-117
- 高木裕子（1992）「高次元での『自己評価表』をめぐって」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』3号、pp.77-98
- 林朝子（2007）「他者評価と自己評価が学習者に与える影響について―日本語中級クラスにおける実践を通して―」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』Vol.7、国際交流基金バンコク日本文化センター、pp.233-242
- 村田晶子（2004）「発表訓練における上級学習者の内省とピアフィードバックの分析―学習者同士のビデオ観察を通じて―」『日本語教育』120号、日本語教育学会、pp.63-72